修士論文(要旨)
2024 年 1 月

中国の高齢者における社会的活動への動機づけが社会活動に与える効果と動機づけの関連要因

指導 杉澤 秀博 教授
国際学術研究科
国際学術専攻
老年学学位プログラム
222J5004
趙 豪帝

Master’s Thesis (Abstract)
January 2024

Effects of motivation on social activity on social activity among Chinese older people and motivation-related factors

ZHAO HAODI
222J5004
Master of Arts Program in Gerontology
Master's Program in International Studies
International Graduate School of Advanced Studies
J. F. Oberlin University
Thesis Supervisor: SUGISAWA, Hidehiro

目次

1. はじめに ..... - 1 -
1－1. 研究背景 ..... - 1 -
1－2. 先行研究 ..... - 1 -
1－2－1. 社会参加の健康への効果 ..... - 1 -
1－2－2. 社会参加への要因研究 ..... - 2 -
1－2－3. 高齢者の社会的活動への動機付け ..... - 2 -
1－3. 研究目的 ..... - 2 -
1－4. 用語定義 ..... - 2 -
1－5. 分析枠組み ..... - 3 -
2. 研究方法 ..... - 3 -
2－1. 研究対象 ..... - 3 -
2－2. 配布・回収方法 ..... - 3 -
2－3. 測定 ..... - 4 -
2－4. 分析方法 ..... - 6 -
2－5. 倫理的配慮 ..... - 7 -
3. 結果 ..... - 8 -
3－1. 分析対象者の特性 ..... - 8 -
3－2. 社会活動の動機づけが社会活動に与える効果（表 3, 表 4, 表 5） ..... - 8 -
3－3. 社会活動の動機づけに影響する要因（表 6） ..... - 10 -
4. 考察 ..... - 11 -
4－1. 動機づけ尺度の妥当性・信頼性 ..... - 11 -
4－2. 動機づけが社会活動に与える効果 ..... - 11 -
4－3. 関連要因が社会活動参加動機付けに与える影響 ..... - 11 -
4－4. 本研究の限界と今後の課題 ..... - 12 -
文献

研究背景

近年，高齢者の社会活動への参加も社会の一員として担う活動として重要視されており，高齢者の身体的・精神的健康維持と経済活性化に関連していることも明らかにされている（藤原，2018）．更に，厚生労働白書（2020）によると，高齢期を「第二の現役期」として活き活きと過ごすためには，様々な環境を整備する必要があり，社会の一員として何らかの役割を最後まで持ち続けられること，それが健康寿命を延ばすことになると指摘されている．

しかし一方で，活動的であることを促す風潮は活動的な高齢者を社会的に望ましい存在として規定してしまう問題があること（Martinson & Minkler, 2006）や高齢者を生産的な方向へと強制する圧力になることが懸念されている（Moddy,1993）．志賀（2020）によると，進歩し明らかにされてきた科学的知識を得ながら老いとの付き合い方を獲得しつつ，離職等を契機に社会との距離が開きそうになるのを自ら踏みとどまろうとしたり，あるいはこれまでにない地域とのかかわりを作りながら，主体的な存在として自己認識していく主体的な存在としての高齢者観を今後社会的に共有すべきものと提言している．

研究目的

本研究では，中国の高齢者を対象に，社会参加しているか否かではなく，社会的活動参加動機づけに着目し，動機付けが社会活動に効果があることを確認すること，次いで，動機づけに関連する要因を，「準備要因」「強化要因」「実現要因」に着目して明かにすることを目的とする．

研究方法

1）調査方法

中国河南省洛陽市に在住している定年後の高齢者は研究対象とした．調査は自記式調査票を用いた配票留置・訪問回収法と web 調査を併用した．

2）従属変数

「社会的活動参加動機づけ尺度」（堀口・小玉,2014），「社会活動指標」（橋本ら，1997）を用いた．

3）独立変数

①準備要因では「活動能力」と「主観的健康感」という 2 因子とした．②強化要因では「子供からの手段的サポート」，「配偶者からの手段的サポート」という 2 因子とした．③実現要因では「活動場所の数」という 1 因子により構成された．

4）基本属性

測定項目は年齢，性別，学歴，経済状況，4 項目から構成された．

分析方法

1）社会活動参加動機付けが社会参加に与える影響

社会活動指標を従属変数に，動機づけ尺度の下位尺度，性，年齢，学歴，経済状況，準備要因，強化要因，実現要因を独立変数として投入し，重回帰分析を実施した．

2）関連要因が社会活動参加動機付けに与える影響

社会活動に影響する動機づけ尺度の下位因子をそれぞれ従属変数に，準備要因，強化要因，実現要因，性，年齢，学歴，経済状況を独立変数として投入し，重回帰分析を実施した．

分析には SPSS Version 4.2 を用いた．

結果

回収した質問票は 179 通であった．その中，配票留置・訪問回収法で回収した 30 通（回収率は 100%）であり，web 調査で回収した 149 通であった．分析対象者の基本属性について，年齢の平均は

57.0 歳，男女の比率はほぼ半数ずつであった．就学年数は 13.4 年，経済状況の平均は 2.79 点で，平均的には「家計にあまりゆとりがないが，それほど心配なく暮らしている」という程度に相当した．

内的動機づけと外的動機づけを同時に独立変数に投入し，重回帰分析を行った結果，社会活動への内的動機づけが強い人で社会活動が有意に活発に行われていたことが明らかにされた．更に，内的動機づけと外的動機づけを単独で重回帰分析に投入し，その結果を比較的に考察した場合，外的動機づけから社会活動への有意な効果は内的動機づけによって説明されたことがわかった．

内的動機づけを従属変数にし，重回帰分析を行った結果、準備要因である「活動能力」,強化要因である「配偶からのサポート」が有意な効果が観察された．

考察

本研究では，因子分析の結果に基づき動機づけ尺度を 2 次元構造に修正した妥当性・信頼性について考察した．そして，外的動機づけが強い人々は動機付けという点では社会活動に有意な効果があるものの，外的動機づけの独自効果には乏しく，動機付けの種類としては内的動機が社会活動に有意な正の効果があることを示唆している．更に，「内的動機づけ」に効果があった関連要因に対して，先行研究と研究・調査背景を踏まえて考察した．

文献

党 俊武(2021).构建适应老龄社会的“主动健康观”.老龄科学研究, *9(2)*, 1-10.

藤原 佳典(2018).高齢者のシームレスな社会参加と健康の関連.予防精神医学,*3(1)* , 71-85.

国家卫生健康委员会(2022).2021 年度国家老龄事业发展公报. https://www.gov.cn/xinwen/2022-10/26/content_5721786.htm.(参照日 2023 年 11 月 19 日).

原田 隆・加藤 恵子・小田 良子・内田 初代・大野 知子(2011).高齢者の生活習慣に関する調査(2)－余暇活動と生きがい感についてー.名古屋文理大学紀要,*11*, 27-33.

橋本 修二・青木 利恵・玉腰 暁子・柴崎 智美・永井 正規・川上 憲人・五十里 明・尾島 俊之・大野 良之(1997).高齢者における社会活動状況の指標の開発.日本公衛誌,*44(10)*,760-768

堀口 康太・大川 一郎(2018).高齢者の社会的活動への動機づけと他者との関係性の関連.教育心理学研究, *66(3)*, 185-198.

堀口 康太・小玉 正博(2014).老年期の社会的活動における動機づけとwell-being(生きがい感)の関連―自律性の観点から―.教育心理学研究,*62*, 101―114.

茨木 俗子(2020).中高年者の社会参加活動の要因に関する文献検討.老年社会科学, *42(1)*, 7-20.

井上 彩乃・田高 悦子・白谷 佳慧・有本 梓・伊藤 絵梨子・大河 内彩子(2016).地域在住高齢者における社会活動尺度の開発と信頼性・妥当性の検討.日本地域看護学会誌 *19(2)*, 4-11.

今野 浩一郎・丸山 桂(2021).「人生 100 年時代」長寿社会における新たな生き方・暮らし方に関する調査研究報告書.連合総研レポート,*34(3)*, 19-23.

厚生労働省(2020).令和 2 年版厚生労働白書－令和時代の社会保障と働き方を考える－. https://www.mhlw.go.jp/stf/wp/hakusyo/kousei/19/.(参照日 2023 年 11 月 19 日).

古谷野 亘(1987).地域老人における活動能力の測定--老研式活動能力指標の開発.日本公衆衛生雑誌 = Japanese journal of public health *34(3)* , 109～114.

林 崇德(2009).发展心理学. 浙江教育出版社,623p.

Martinson, M., & Minkler, M. (2006). Civic engagement and older adults :A critical perspective. The Gerontologist,*46*,318-324.

宮原 洋八・小田 利勝(2007).地域高齢者の主観的健康感と運動能力, 生活機能, ライフスタイル, 社会的属性間との関連.理学療法科学,*22(3)*, 391-396.

宮下 智葉・田髙 悦子・伊藤 絵梨子・有本 梓・大河内 彩子・白谷 佳恵(2017).地域在住要支援高齢者における社会活動の実態と関連する要因の検討.日本地域看護学会誌, *20(2)*, 12-19.

Moddy,H.R. (1993). Age,productivity,and transcendence. In S. A. Bass, F. G. Caro, & Y.-P. Chen (Eds.),Achieving a productive aging society. Westport,CT :Auburn House,27-40.

森永 朗子・原田 春美・緒方 久美子・兼岡 秀俊(2022).男性高齢者の社会活動への参加要因に関する研究.日本地域看護学会誌, *25(1)*, 4-11.

柴田 康順(2023).自己像の不安定性, 自己注目と心理的ストレス反応の関連におけるアイデンティティの媒介効果.パーソナリティ研究-e Japanese Journal of Personality Psychology 2023, *32(2)*, 85-95.

石 金群(2015).独立与依赖:转型期的中国城市家庭代际关系.社会科学文献出版社,247p.

志賀 文哉(2020).高齢者の社会参加とその支援に関する一考察.とやま発達福祉学年報 *11*, 3-10.

杉澤 秀博・張 星眸(2014).中国の一人っ子世代における老親扶養に関連する要因.老年学雑誌, *5*, 91-100.

蘇 思栄(2019).変化しつつある中国現代家族の世代間関係―北京の一人っ子世代を中心に―.言

語と文明, *17*, 32-52.
後迫 由衣・和泉 比佐子・小寺 さやか(2021).地域在住高齢者の社会活動の関連要因.日本公衆衛生看護学会誌, *10 (2),* 34-42.
Lawton MP.(1972).Assessing the competence of older people. Kent DP, Kastenbaum R, Sherwood S (Eds.).Research, Planning, and Action for Elderly: the Power and Potential of Social Science, Behavioral Publications, New York, 1972.(1), 144—165.
王 树新(2004).社会变革与代际关系研究.首都经济贸易大学出版社,245p.
栁澤 節子・小林 千世・山口 大輔・上原 文恵・吉田 真菜・鈴木 風花・松永 保子(2018).主観的健康感とその要因についての検討―生活形態と健康維持への意識との関連―.信州公衆衛生雑誌, *12(2)*, 107-113.
吉川 雅也(2020).有機的統合理論における自律－他律パラダイムを用いた主体性概念の理解―“主体的に行動しなさい”は矛盾しているのか―.関西外国語大学, 研究論集, *111*,193-211.